

失われた絵

高橋たか子



失われた絵

高橋たか子

河出書房新社

発表誌

失われた絵文芸 昭和四十八年六月号
白い光すばる 昭和四十八年第十三号
夏の淵 文学界 昭和四十八年十一月号

著書

「彼方の水音」 講談社
「骨の城」 人文書院
「双面」 河出書房新社
「空の果てまで」 新潮社
「共生空間」 新潮社

目次

失われた絵	5
白い光	133
夏の淵	177
「私」という人称——あとがき	229

作品集

失われた絵

失われた絵

いつの頃からだろう。たぶん二年ほど前からのように思う。私は或る絵をぼんやり思い出すようになった。なぜ、その絵のことが記憶の表面に浮かびあがってきたのか、私には納得できない。どうやらその絵は、両親の家の書棚に並べられていた美術全集のなかで、子供時代の私が見たものであるらしかつた。そして私が十歳のとき、家は空襲で全焼してしまったので、もちろんその美術全集は、家を形づくっていた木材や金属などよりいちばん早く燃えつきて、黒い平たい燃えがらになり、かるがると虚空を飛んでいって、完全に消滅してしまっただろう。

それに私は大体、そんな美術全集のことは、空襲のとき以来現在にいたるほぼ二十五年の間、ほとんど思い出したことはなかったし、ましてやそこに納められていた一枚の絵のことなど、私の頭を掠めてすぎることさえなかったのだ。当時は美術全集といえば、あれが唯一のものであったのだろうが、昨今はさまざまな版や絵の雑誌が、本屋に氾濫している。二十五年ほど昔の、空襲で失った絵を、惜しむ必要はすこしもないのであった。

にもかかわらず、その美術全集に納められていた一枚の絵が、初めのうちはぼんやりと、目を

重ねるにしたがって克明に、思い出されてくるのである。そして懐かしいような情緒とともに、それを思い浮かべているのである。完全に忘れていた絵を、どうしてそれほど克明に記憶のなかから取り出してこられるのか、不思議でさえあった、美術全集の大判の一ページ全体にわたって印刷されていた、その彩色の絵の、一つ一つの細部を、私はありありと見るようになってきた。

それは男女を描いた絵であった。もしかしたら愛という題でもついていたかもしれない。題までは覚えていないが、その絵には、愛という言葉が、いちばんふさわしいように思われるのだ。その絵は複雑な構図のものであったので、もっと別な題、つまり詩的な術学的な題がついていてもよさそうなものだったが、私にはどうしても愛でなければならぬ気がした。

その絵というのはこうである——。一人の裸体の女が後向きに立っている。女というよりも少女のような軀であった。後向きだから顔はわからない。全身から羞らいがいきいきと浮きでくると感じられるのは、細い腰をわざとそうするふうにすこし撓めているせいと、その肌の青みがあった白さのせいかもしれない。美術全集に納められているものの大半は西洋の絵であったので、その絵も西洋のものにちががなく、この少女のような女は、西洋の女人像にありがちな、天使を模したような夢想的な趣をもっていた。

女はここらもち顔を右にむけ、右腕を右のほうに伸ばしている。そこに、裸体ではなく、衣服をまとった男が立っていた。男は女のほうへ真横をむいていて、一匹の獣を両手でかかえて女にさし出している。それは一角獣であった。男が贈りものとしてそれを女に与えようとしている瞬

間が、あらゆる動きを停止させられて、捉えられているのである。そういえば、絵の左端には、柱時計が浮いていて、その針はきっちり十二時をさしていたが、振子が垂直に垂れているところを見ると、時計は止まっているらしい。時間を超えた瞬間というものを暗示しているのだろうか。

それは油絵ではなくて、なにか壁画の一部のように見うけられた。全体が一樣に不鮮明で、部分的にひどくはつきりしないところがあり、絵具の膜がぼろぼろはげ落ちているところさえあった。たとえば男の顔にあたる部分がそうなのだった。女はもともと後向きだし、男の見せている横顔は、誰かが故意に消したように斑らになっているので、それがどういう男女の一对なのかは判別しにくい。ただ男が女にささげている一角獣だけは、なまなましい生動感があつて、その角の先にいままさに女の右手が乗せられようとするところで、すべてが停止しているのであった。

もう一つ、妙な人物が描かれていた。一角獣の中にはさんで女が左に男が右に立っている画面の、中央からかなりはずれた右端のところに、一人の着衣の人物がいるのである。この人物だけは正面をむいていて、はつきりと顔が見てとれ、しかも眼を大きく見ひらいていた。女のように男のようでもあり、どちらにでもとれる中性的な感じであった。その眼附きは無表情である。だがそれは絵具があまり鮮明でないための印象にすぎないのかもしれない。

画面全体の彩色はくすんでいて、人物は三人とも肉体を感じさせない扁平な形をしていた。そして年代というものが堆積させていく垢のようなものに、すべてが覆われているのである。それが古い絵だということよりも、むしろ、私の奥に長年のあいだ秘められていたために、記憶の微

をまぬがれることができなかったのであろう。

私はこの奇妙な構図の絵を、昔の美術全集でもっと詳しく確かめてみたかった。あの美術全集は、一巻の最初の五、六ページが色刷りで、後は白黒のものが続き、そして最後の何ページかは解説に当てられていたはずだ。その解説を読んでみたいと私は思った。だがそう思うだけで、積極的にそうはしなかった。第一、それがどういう美術全集なのか、私は名前も版元も忘れてしまっていた。昭和十年代の頃に、ちょっと蔵書のある家になら、すくなくとも飾りとしてでも置かれていたような美術全集、そう言って探せば、難なく見つかるかもしれない。だがそれを訊ねてみる人もないままに、私はこの二年ばかりを過していた。それにまた、この絵が私の意識にどっかり居居ったというのではなくて、ただ時折思い出すぐらいのものだったから、私にはどうでもいいようなものだったのである。

私は仕事をとどけに行った帰り、まだ三時過ぎだったので、G通りの楽器店に寄ってみた。その店の建物の五階には音楽教室があつて、桂子がそこで、月曜と木曜の午後にピアノを教えているのである。独り者の私のところへは桂子は時折来るが、夫や二人の子供をもつ桂子の家へは、私はほとんど行かない。気紛れな私は、気の向いた時に、楽器店の一階の、二階から降りてくる階段の下に立つことにしている。レッスンの終る四時から十分ぐらいすると、彼女はエレヴェーターではなくて、かならず階段から現われる。それも大抵一人で降りてくる。五階から一階ま

で、なぜ歩いて降りてくるのか。私はいつかそのことを訊ねてみたいと思っている。だが私の想像が突飛に思え、ついつい訊ねないままになっている。

彼女にとって音楽にかかわっている時間がいちばん充実したものであることを、私は知っている。オルガスムを終えた彼女が、そのじんわりした余燼をゆっくり味わいながら、一步一步と、五階から一階までの段々を降りてくるのだという気が、私にはするのである。コンサート・ホルの舞台上で演奏を終えた彼女がそこから降りてくるのなら、私の想像は当を得ているだろう。一つの曲は性の行為の完全な模倣だからである。だからその演奏はいわば代償行為のようなものだ。だが、ここではたかが音楽教室での授業なのである。だから私は彼女にその話をするのをためらっている。にもかかわらず、彼女が授業を終えて、エレヴェーターからではなく、長い階段をゆったり充ち足りた足どりで降りてくる時、私はなぜかそんな想像にとらわれてしまうのだった。

楽器店の一階では、客が試聴しているらしいチャイコフスキーが鳴っていた。その旋律が押しながしていく暗い情熱に、私はふいにのめり込むようにして耳を傾けた。と、それは旋律の途中で切れてしまった。客が試聴を止めたからだろう。私はそのことで、現実というものの地のあらあらしさに立ち向わせられた気がし、すこし不快になった。一階の空間全体がしらじらしてきた。同じ曲が、中断されたところから続けられていくのを、私はじいっと待っていたが、そうはならず、ロックが鳴りだした。私の前を、一組の外人の男女が通っていった。毛孔がぶつぶつと

して、鮫肌めいた、肉食人種に特有な、中年女の肌が、一瞬、私の眼に拡大されて見えた。

私はふと桂子の裸体を思い出した。外人の女の肌との対照のせいだろう。桂子ほどの綺麗な軀を、私は見たことがない。それは十年ほども前、つまり私たちが二十四、五歳だった頃のことだから、いまも彼女の軀がそうであるかどうかは知らない。私たちは彼女の家でいっしょに風呂に入ったのだった。彼女はまっしろで、その白さにむらがなく、肌の面がつるつるとなめらかで、骨はどこにも見えず、線がすべて曲線なのである。痩せてもいず肥ってもいない。腕を伏せたようなという形容どおりの乳房が胸に乗っている。そんな白い軀は、しばらく湯槽につかると、今度は全体がむらのないピンク色になった。見惚れていた私にむけて、ちょうど食べ頃でしょ、と桂子は言った。その軀を最初に食べた男のことを、私はいま思ってみた。私がうっとりした桂子の軀は、しかし男から見てどうだったろう。どこにも欠点のない軀は、逆に官能性を欠くと感じられないかどうか。

クリーム色のワンピースを着た桂子が、左手にオーヴァをかかえ、右手に楽譜のはいったカバンをさげて、例のとおり階段から降りてくるのが見えた。

「うちへこない？」

私は見あげて言った。彼女は降りながら、駄目だというしるしに、首をかるく左右に振った。

「話でもあるの？」

彼女はそう言い、私と肩をならべて歩きだした。私のほうがすこし高い。彼女と並ぶと、私は

いつも自分が痩せていると感じる。

「別に。退屈しただけだわ」

私は答えた。だが本当に答えたわけではなかった。いったいこの気分をどのように他人に説明すればいいのだろう。それに、私の生に退屈という生きものが棲みついたのは、いつの頃からだったろう。私は男とともに過すとき以外は、つねに退屈していた。かつての私はこんなふうではなかっただけに、そのことを不可解に思っている。

「深刻すぎるんじゃない」

頭のいい彼女は、私の一瞬の内省を見ぬいたふうに言った。

「何が？」

深刻なものがこの世にあればどんなにかいいことだろうと思う。

「つまりね、退屈だとかそうでないとか、あなたは考えるのね」

そういう桂子は、たしかに感覚のままに、生のなかを魚のように泳いでいる。快樂主義者という言葉さえ当てはまらない。何々主義者とは何々を求める人である。だが彼女はすこしも求めず、彼女が足をとどめた所にはかならず快樂が見いだされるといふ具合なのだ。どんな場所からでも快樂を拾い、そのことをかならずしも意識していない。彼女はいつものびのびと充ち足りているのであった。

私たちはY駅から国電に乗った。並んで坐ることができた。流行をわざと無視した、だぶだぶ

したオーヴァを着ている私たちの前を、流行に合わせて誰も彼もが同じにみえる女たちが乗り降りしていく。

桂子は何かの合図のように、指先で私の膝をたたいた。ピアノの鍵盤をたたき馴れているので、かちんとした感じで私の肉を打ってくる。彼女はそうしておいて、私の視線を向いがわの座席のほうに促した。

小学校一年か二年ぐらいの男の子が、ちょうど私たちの向いに、一人でぽつんと坐っているのである。大きな黒い眼がじいっとこちらに注がれている。

「不思議だと思わない？」

桂子は私の耳に口を近づけて言った。私はいっこうに何も感じなかった。子供はよく大人をじろじろ眺めるものなのだ。

「まだあんな子供でしょ。それがちゃあんと異性の眼をして見てる」

彼女がさらに言ったので、私は男の子をそのつもりになって見つめてみた。男の子は初めは桂子を見ていたらしかったが、私の視線がうごいたのに気づいたせいか、私のほうを見た。真直に見ている。私はしかし、そこに異性の眼を感じなかった。

「あなたがそう思うからよ」

と、私は言った。桂子が男の子に異性を感じるのだろう。私は子供嫌いなので、異性であつても男の子には全く関心がない。